



TITLE:

京大広報 号外

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 号外. 京大広報 2000, 0004n: 867-878

ISSUE DATE:

2000-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196563>

RIGHT:



京大広報

(号外)

2000 4



目次

入学式

学部入学式における総長のことば 868

大学院入学式における総長のことば 872

大学の動き

平成12年度学部入学式 874

平成12年度大学院入学式 875

名誉教授称号授与式 876

平成12年度入学者選抜学力試験の結果 877

医療技術短期大学の動き

平成12年度医療技術短期大学部入学式 878

医療技術短期大学部名誉教授称号授与式 878

平成12年度医療技術短期大学部入学者
選抜学力試験の結果 878



入学式

学部入学式における総長のことば

平成12年 4月11日

総長 長 尾 真

平成12年度京都大学入学式に出席することができた2,913名の皆さん、京都大学入学まことにおめでとうございます。ご列席の元総長、名誉教授の先生方、各学部長はじめ京都大学の全教職員とともに、皆さんの京都大学への入学を心からお喜び申し上げます。また今日まで皆さんを育てあげられましたご列席のご家族や関係者の方々にもお喜び申し上げます。

皆さんを今日から構成員として迎え入れます京都大学は、明治30年、すなわち1897年に新しい学問を創造することを目的として設立され、自ら問い、自ら学ぶということを理想とする教育を今日まで百三年間にわたって行って来ました。「学問の自由」を日本の大学に根づかせるために果たして来た京都大学の歴史は、日本の大学史に大きな足跡を残しているのです。

物事を根本的に考え、創造を重んじた京都大学の学風から、一方では澤柳事件、滝川事件等の、「学問の自由」を勝ち取るための戦いをしましたし、また一方では自然科学分野で日本人が受けた5人のノーベル賞学者のうち4人までを本学卒業生から出したという輝かしい実績を持っております。数学におけるノーベル賞にあたるフィールズ賞も日本人受賞者3人中の2人は本学の関係者で占められておりますし、他にも多くの方々が国際的によく知られた業績を挙げておられます。また社会の各分野において中心となって活躍する多くの優れた人材を輩出して来ました。このような実績をもつ京都大学で学ぶことによって、諸君も将来の日本、世界に貢献する人になっていただくことを期待いたします。したがって、諸君はこの記念すべき入学式において、これから本当の意味での学問をするのだという決心をしていただきたいと思います。

大学へ入ると諸君は学問を学びます。これは人類が築き上げて来た知識の体系であるとともに、また物事を考える方法を学ぶことでもあります。京都大学では特に後者、すなわち物事を深く根元的に考えるということを重視し、これを学生諸君が学びとってくれることを期待し、また要請するのであります。

入学試験において諸君に課した問題は、よく考えればかならず解ける問題でありましたが、受験生諸君の多くは、始めからそういった問題を解こうとせず、完全に放棄していたようにみえるのは、我々としてはまことに残念であります。京都大学に入って学問をしようと志す学生は、よく考えれば解けるという問題にこそ積極的に挑戦すべきでありましょう。

高校までの勉強はとかく入学試験のための勉強となり、それは暗記によるといったことになりがちですが、これからの諸君の勉強はそういったことでは全く役に立ちません。大学では、物事に対してはいろいろな立場からいろいろな見方が出来ること、論理的に推論することによって、種々の条件から種々の結論を導き出せること、といったことを学びます。解答のない問題、いくつもの解答のあり得る問題といったことに対して、どのように議論を進めることが出来るかといったことも学びます。

以前の大学では知識を授けるということに教育の中心があったといえるかもしれません。しかし今日では膨大な数の本が出版され、インターネットなどでも求める知識は探せばかならずどこかに存在するという状況になって来ております。毎日世界中で起っていることは新聞やテレビで知ることが出来ますし、情報は洪水のごとく我々に押しよせて来ています。したがってこれからの我々は情報や知識を獲得するというよりは、自分にとって不必要な、あるいは有害な情報をいかに拒否するか、排除するかということの方が大切になって来ているともいえるのであります。そのためには物事に対する判断力、善悪に対する鋭い感覚と価値観をもつことが必要となります。

学問や研究の世界についても似たことがいえまゝす。19世紀から20世紀前半までは、各分野において学問の本質的な部分が確立され、学問体系が形成されて来ました。したがって以前は、ある学問分野で読むべき本はどれとどれであるか比較的数量少ない重要な本がはっきりしていたのであります。しかし知識や情報のあふれかえっている今日では、誰でも欲

しい知識や情報を瞬時に得られるわけで、知っているということに特別な価値を認める時代ではなくなって来ており、そこから新しい知識を作り出すというところにこそ価値があるという時代、すなわち「知価の時代」となって来ております。そういったことから、膨大な量の研究成果が出されるようになって来ていますが、その中には知識や情報を使えばこんなことが出来たとか、こんな結論が得られたとかいった、いわば自分の知的能力をひけらかすだけの、論文のための論文が多くなって来ているのは残念なことであります。そのようにして示された結果が、学問にとって、また社会にとってどんな必然性や意味があるのか全く分からない、知識を単にもて遊ぶといったものが多すぎるのであります。

そういう学問も、あり得るとしても、京都大学においては少なくとも学問の本質的な進歩にかかわること、社会に対して究極的には貢献することになる実質的な研究成果を出して来ており、また今日も日夜そのような学問態度でがんばっているのであります。

知識をもち、これを利用するということは、能力さえあれば、善意から、悪意から、あるいは遊び心からも出来ることであります。すぐれた大学で学び、官庁や会社に入って自分のもつ知識と能力によってどんどん昇進した人が、その知識を用いて犯罪的な行為をしたといったことは、よく新聞などに出来ますが、これは知識の利用の仕方が誤っていたというべきなのでしょう。自然科学は価値独立あるいは価値中立であるといわれていますように、知識そのものに問題があるというよりは、知識をどういう方向に利用するかというところに問題があるというべきなのであります。つまり、知識を使う人の意図にこそ最大の問題があり、今日これが社会において厳しく問われているということでもあります。

それは自分の発言、行動に責任を持つことにつながります。個人の世界における責任はもちろんのこと、組織や社会の枠組の中での自分の地位、役割に対して特に十分な責任感を持たねばなりません。日本においては、組織における責任はしばしば全体の責任として、責任の所在が不明確となりがちであります。が、これからの時代においてはそういったことは許されません。悪意をもってやることは言うにお

よばず、無為の犯罪、つまり行動しなければならないにもかかわらず何もしないということにも責任があり、罪があり得るのだということをよく自覚することが必要なのであります。

今日、情報や知識はどこにでもあります。インターネットの中を探せばいろいろな情報や知識がいとも簡単に得られます。したがって、基本的な知識は知っていなければなりません、ある程度以上の詳しい情報や知識は必要なときに取り出せばよいわけでありまして。これから大切なことは、そのような知識をどのように使うかということ、知識をひけらかすのではなく、ほんとうに社会の役に立つために使うことが大切なのであります。これからの我々が学ぶべきことは、知識や知識を用いて種々の結論を導き出す推論の方法とともに、それらをいかに適切に行うか、倫理、道徳に反しないように活用できるか、社会に対してほんとうに貢献していける形で用いることが出来るかということをよく考え、行動することを学ぶことでありましょう。

大学では知識と知識の利用法はよく教えますが、残念ながら人間にとって最も大切な善を実現する形で知識を用いる道ということはほとんど教えていないのであります。倫理学や道徳論などは哲学の一分野として教えてはいますが、これはあくまでも知識として教えているのであって、実践の学として教えているのではないというところに、価値中立である学問・知識を取り扱う大学の限界があると言わざるをえません。

中国古典の一つに『大学』があります。人間は心を正しくし、誠意をつくさねばならず、そのためには物の道理をきわめ、学問の修得をしなければならないということを論じた書物であり、古来真の学問の修得を志すものにとっては必読の書でありました。この『大学』の冒頭に「大学の道は明德を明らかにするに在り。民を親^{あら}たにするに在り。至善に止まるに在り」という言葉があります。諸橋轍次先生の解釈によれば、大人^{たいじん}、君子の学の目的は、第一に天から授けられた徳性、つまり良心を立派に磨きあげることであり、第二にはひとり自分を磨きあげるのみならず、これを推し広めて世の一般の人々をも、昨日よりは今日、今日よりは明日と、明德を明らかにさせることであり、そして第三にはこの二つの項

目を至高至善の地位に保たせることである、という意味であります。

今日、我々はこの中国古典『大学』の精神を忘れて、大学で知識のみを学び、知識をもて遊んだり、立身出世したり、金もうけをしたりすることに夢中になってしまっているのです。しかしこれが間違っていることは、今日の社会の政治的・経済的混乱とそれに翻弄されている人間、多くの悪質な犯罪などを見ればすぐ分かることでありましょう。我々は知識の技法、知の遊戯を超えた世界を目ざさねばならないのであります。それは、何のための学問かという問いであり、『大学』のいわんとするところでありましょう。

諸君の大学生活においては、ぜひともこのことをよく自覚し、知識を学ぶとともに、常にこれを正しく使い、自分の行動を正々堂々としたものにするよう精神の鍛錬をしていただきたいと思います。そのためには多くの先生、友人と接し、お互いに心を開いて語り合うことが必要であり、我々京都大学ではこのことをはっきりと自覚し、ゼミや研究室での教育・研究活動を通じてその努力をしているのであります。

これから諸君が活躍しようとしている21世紀社会は、実に多くの解決困難な課題をかかえております。20世紀の世界は多くの偉大な成果をあげて来ました。科学は目を見はる発展をとげて来ました。物理学においては古典力学から相対性理論の世界、さらに量子力学の世界が開かれました。これは半導体材料技術などの無数の技術を発展させ、今日のコンピュータと情報時代を技術的に支えるものとなりました。化学の発展は19世紀から20世紀にかけて膨大な数の有用な物質や薬品を作り出し、さらに高分子の種々の物質材料の発明は天然の物質材料よりもすぐれた性質を示すものとなっております。また人類は月に人を送り込むとともに、あくなき宇宙の探検を行うまでになって来ました。

このように、20世紀科学技術は目を見はる物質文明を実現し、社会を豊かにして来ましたが、一方では深刻な多くの問題をも作り出して来たのであります。20世紀を終わろうとする今日、これが一挙に顕在化したという観があります。

たとえば、大気汚染や水質汚濁、あるいは森林伐

採などによって地球環境が破壊されていく問題、石油等のエネルギー源が枯渇していく中で原子力にかならずしも安心して頼ることができないという問題、人口爆発と食糧危機がおとずれるであろうという心配、さらには環境ホルモンによる生体への影響という恐怖、生命科学の発展に伴って遺伝子操作が自由に行えるようになって引き起されて来ている倫理・道德問題などはその典型的なものであります。

これらの深刻な問題を解決しなければ人類は21世紀中に滅亡してしまうだろうとも言われていますが、だからといって我々は19世紀以前の社会生活にもどることは出来ません。これはどうしても科学技術の力によって克服していかなばならないのであります。

今日、日本の経済は依然として低迷しており、これを建てなおすのに政府や企業は懸命の努力をはっておりますが、一方では、国際化、グローバル化の波が強力に押しよせて来ております。これまでは政治や経済、企業活動はもとより、大学の活動なども国内だけを考えてやっておればよかったのに対して、今日では世界の企業が日本に押しよせ、日本的なやり方を国際的、アメリカ的な考え方と制度に合わせるように要求し、内向き志向の日本に対して門戸開放させようとしております。今日はまさに明治維新以来の第二の開国の時期なのであります。

このような劇的な変革の時期に必要な人材は、高い志をもった人達であります。若い諸君が国際的視野をもってよく勉強し、これからの日本、世界をリードして行く人材となっていくことが期待されています。

日本人はこのような劇的な転換期においても依然として内向きであり、仲間うちでうまくいくことを第一に考え、外に出て行き、多くの人達に自分の考えを説明することを積極的に出来ないでありますが、これからの日本はそれでは世界の中で生きていけないのであります。欧米はもとよりですが、特に中国や韓国、その他アジア諸国との関係を重視し、相互理解、対等の関係で相手の立場を尊重しながら、こちらの考え方を説明し理解を得るということが出来ねばなりません。

京都大学に入学した皆さんは、将来自分のことでなく、日本のため世界のために働き、よりよい

社会、よりよい世界を築いていくことのできる数少ない中心的人物であります。皆さんは、この日本の大転換期において、日本や世界のために貢献しようという高い志を持ち、勉学に励んでいただきたく存じます。志を持ち、常に努力していけば、いつかは目標が実現されることは間違いありません。

今日、情報ネットワークは世界中どこにいても利用できる時代となって来つつあり、まちがいなく21世紀は情報社会の時代となるでしょう。世界中の誰とでもコミュニケーションを行うことができるようになり、国境という概念はますます希薄となります。そこで浮かび上がってくるのは個人であります。今日でも世界各地で多くの日本人が個人として活躍し、その地域、その国、あるいは世界に対して貢献しておられるのであります。

皆さんも若い間に外国を見、また外国を経験してください。外国を通り一遍の旅行をするのではなく、そこにいる人、できれば同じ年代の青年とよく話し合い、お互いの考え方をたたかわせることが出来れば言うことはありません。世界にはいろいろな物の見方をする人達がいること、その中で自分はいかにあるべきかということをやおうなく考えさせてくれます。新しい創造的なことは異なった文化が衝突することによって作られることは広く知られています。皆さんが世界の人たちと自由に意見をたたかわせる人間となるためには、自分の人格を確立しなければならず、また、日本人としての文化と精神を学ばなければならないでしょう。皆さんの年代の間に少しでもそういった訓練をし、経験することは、これからの国際化時代を生きなければならない皆さんの一生にとってかけがえのない価値を持つことになるのであります。

国際化時代を力強く生きていけるこのような人物を養成するのが、我々、京都大学のもつ目的の一つであります。そのためには皆さんに多くのことを学んでもらわねばなりません。情報リテラシー、即ち情報活用能力や、外国語、特に英語によるコミュニケーション能力を養成することが大切です。英語をよく聞きとり自由に話せるようになるとともに、いろいろな問題に対してしっかりと自分の意見を持ち、これを的確に相手に伝えることが出来ねばなりません。そのためにも諸君は広く深く

種々の勉強をしなければならないのであります。そういった点からも、京都大学では各学部での専門教育とともに、主として1、2年次に学習する基礎教育、一般教育を重視しております。皆さんは京都大学を卒業するための最低必要数の科目で満足することなく、広く種々の学問を学び、自分の人生、社会や世界について深く考えていただきたいのであります。

京都大学は学問の自由を重んじる大学であります。精神の自由があってこそ真の創造を行うことができるわけであり、我々は学生諸君についても学問の自由を尊重しております。ただ注意すべきことは学問の自由、個人の自由というものは無制限のものではあり得ません。社会が自分だけで構成されているのではなく、自由な人格をもった多くの人の集まりであるところから来る必然的な限界があることであります。人間の道徳心は、カントの言葉をまつまでもなく、人間であるところの根元的なもの、すなわち心の奥底からの必然の声としてわき上がってくるものであり、我々はその心を大切にしなければならないのであります。

京都大学は新入生の皆さんを自ら学ぶ意欲を持った独立した大人として迎え、ともに考えながら学問の道を研鑽していくことを目指しております。諸君は必ずや京都大学のもつ百年余のよき伝統と、すぐれた教官や先輩の中で自らを鍛え、新しい時代の担い手に成長してくれるであろうと期待しております。

大学院入学式における総長のことば

平成12年 4月11日

総長 長 尾 真

平成12年度京都大学大学院入学者、修士課程2,025名、博士後期課程916名、合計2,941名の皆さん、まことにめでとうございます。この中には外国からの留学生、修士課程98名、博士後期課程116名が含まれています。皆さんに対して各研究科長とともに心からお喜び申し上げます。

今日、大学改革が種々の点から進められています。その中で大学院がますます重要視されるようになって来ています。文部省の大学審議会はこのような状況から平成8年10月に「大学院教育研究の質的向上に関する審議のまとめ」(報告)を出し、「今日技術革新の加速化、生涯学習社会の進展等を背景として、学術研究の推進と研究者や高度な専門的知識・能力を有する人材の養成を担う大学院の役割は一層重要になっている」という認識を示しています。

そして、「今社会が必要としているものは、細分化された個々の領域における研究と、それらを統合・再編成した総合的な学問とのバランスのとれた発展であり、学術研究の著しい進展や社会経済の変化に対応できる、幅の広い視野と総合的な判断力を備えた人材の養成である。大学院は、これらの課題にこたえていく上で、中心的な役割を担わねばならない」として、次の3点が特に要請されています。

- (1) 学術研究の高度化と優れた研究者養成機能の強化
- (2) 高度専門職業人の養成機能・社会人の再教育機能の強化
- (3) 教育研究を通じた国際貢献

京都大学では平成3年に人間・環境学研究科という独立研究科をもうけて以来、エネルギー科学研究科、アジア・アフリカ地域研究研究科、情報学研究科、生命科学研究科を次々に作って来ました。そして今年度には、医学研究科に社会健康医学系専攻と修士課程の医科学専攻を作りました。この社会健康医学系専攻は専門大学院という新しい種類の大学院で、高度の専門職業人を養成することに力を入れるものであります。また経済学研究科に社会人の再教育を主目的としたファイナンス工学講座をもうけました。このようにして着実に大学院の多様化を行う

とともに、大学院に重点を移した大学院重点化大学、すなわち研究大学という性格をさらに明確にし、社会の期待に応える努力をしているのであります。

博士学位の授与も年々増加して来ております。課程博士の学位授与数は1990年度に249であったものが1999年度には558と2倍以上となっております。従来非常に少なかった人文社会系研究科においても最近では毎年かなりの数の博士学位を出すようになって来ていることは、まことに喜ばしいことであります。

西洋の学問は古代ギリシアの哲学から分化進展して来ましたが、近代科学が数学によって支えられ、また実験という手法が確立されるようになって目をみはるような発展がもたらされて来たことは皆さんもよくご承知のことです。そして学問が幾つかの典型的な分野に分かれてきました。明治以後日本に輸入された西洋の学問は、法律学、経済学、理学、工学、医学といった形に分化されたものであります。これは学問とはこういうものであるといった観念を日本人に植えつけました。すなわち、学問はそのような体系の下に行うものであるという、いわば固定観念といったものが作られ、日本の学問世界を長く支配して来たきらいがあります。その結果、たとえば経営に関すること、あるいはビジネスのやり方などは長くノウハウの世界であり、学問としてまじめに取り上げられませんでした。

しかしアメリカは全くちがった風土をもっていて、どんなものでも学問としてしまいます。解決しなければならない問題のある領域があれば、それを積極的に取りあげ、学問体系に作り上げるのが実に上手であります。経営学はもうかなり以前からしっかりした学問として確立されており、日本でもあちこちの大学に経営学部門がもうけられ、その分野の教育研究は実に盛んとなっております。アメリカで確立された学問は他にも行動科学、生活科学、看護学、保険学、環境デザイン学など、挙げればきりがありません。ホテル学といったものも存在し、日本でも最近1、2の大学で教えるようになったと聞き

ます。

要するに、学問というのは未知の世界を論理的、体系的に切り開いていくものであって、その対象は何であってもよいわけであります。伝統的な学問分野だけが学問であるといった窮屈なことをいってはいは学問の発展はないのであります。京都大学では、21世紀に主要な課題となる学問分野として、人間の問題、あるいはエネルギー、情報、生命の問題、あるいはアジア・アフリカ地域の総合的視野からの研究といったことが大切であると考え、これらの名を冠した研究科を作って来たわけであります。学問として何をしたいけないということは全くなく、自由に課題を見つけ、これを解明していけばよいのであります。

私の場合は40年ほど前にコンピュータで言葉を取り扱うことに興味を持ち、今日まで研究をやって来ました。やり始めた頃には、工学部で言葉を取り扱う変わった人間がいるといった認識しかなかったわけですが、今日では日本国内はもちろん世界的にも計算言語学という確立された学問分野として広く認識されるようになっております。京都大学はそのような変わったことをも許容してくれる大学であり、新しい学問を創造する柔軟な力をもった、すばらし

い大学なのであります。

皆さんも大学院へ入学されて、これからいよいよ本格的な研究を始めることになるわけですが、なんといってもこれを解明したいという心をわきたたせる課題を持つことが大切であります。そのような課題を発見するための努力も当然必要であります。自分の一生をかける気持ちを起こさせる課題に出会うことの出来た人は幸福であるといえるでしょう。

大学院修士課程修了で社会に出て行く人達も多いでしょうが、そのような人達も修士課程で十分な知識を得るとともに、研究をすることによって、未知のものを解明し、物事に解決を与えていくにはどうすればよいかということを経験することが大切なのであります。その経験は社会に出てから大変役立ちます。社会における問題は、非常に多くの要素が実に複雑にからんでいることが多いのですが、これをいかに整理し、見通しよくし、それにかかわる人達の理解・合意を得ながら解決していくかといったことが重要であります。これは知識だけでなく全人格のかかわる問題となりますから、自分の人格を磨く不断の努力が必要であります。

皆さんの大学院での勉強と研究が実りあるものであることをお祈りし、お祝いの言葉といたします。

大学の動き

平成12年度学部入学式

4月11日（火）午前10時から、平成12年度学部入学式が、名誉教授はじめ来賓出席のもとに、本学総合体育館において挙行された。

入学式は、京都大学交響楽団による式典曲奏楽、

京都大学合唱団による学歌斉唱に続いて、「総長のことば」があり、午前10時40分に終了した。

今年度の新入生数は、次表のとおりである。



学 部	募集人員	一 般 入学者	外国学校出身 者のための選 考による入学 者	小 計	外国人留学生		小計	第3学年 編入学者	再入学者	小 計	合 計
					国費	私費					
総合人間学部	130人	134人	人	134人	4人	人	4人	人	人	人	138人
文 学 部	220	225		225				10		10	235
教 育 学 部	60	63		63				7		7	70
法 学 部	360	358	9	367	1		1	29		29	397
経 済 学 部	240	238	6	244	4	10	14	18		18	276
理 学 部	301	301		301							301
医 学 部	100	105		105							105
薬 学 部	80	82		82		1	1				83
工 学 部	975	975		975	2	7	9	12		12	996
農 学 部	300	311		311		1	1				312
合 計	2,766	2,792	15	2,807	11	19	30	76		76	2,913

平成12年度大学院入学式

4月11日（火）午後3時から、平成12年度大学院入学式が、名誉教授はじめ来賓出席のもとに、本学総合体育館において挙行された。

入学式は、京都大学交響楽団による式典曲奏楽、

京都大学合唱団による学歌斉唱に続いて、「総長のことば」があり、午後3時30分に終了した。

今年度の新入生数は、次表のとおりである。

研 究 科	修 士 課 程				博 士 後 期 課 程											
	入学者	外国人	留学生	合計	編入 学者	外国人留学生(編入)		再入 学者	外国人留学生(再入)		小計	進学者	外国人留学生		小計	合計
		国費	私費			国費	私費		国費	私費			国費	私費		
文 学 研 究 科	人 97	人 2	人 3	人 102	人 8	人	人 2	人	人	人	人 10	人 53	人 4	人 2	人 59	人 69
教育学研究科	36		2	38				1			1	27	1	3	31	32
法 学 研 究 科	61	4	9	74	1						1	9		2	11	12
経済学研究科	43	2	18	63	7	2	3				12	27	2	2	31	43
理 学 研 究 科	229	1		230	30	5	3				38	137	4		141	179
薬 学 研 究 科	77	1	1	79	4						4	29	2		31	35
工 学 研 究 科	590	9	11	610	28	3	10				41	72	2	4	78	119
農 学 研 究 科	279	4	7	290	15	5	5				25	75	4	3	82	107
人間・環境学 研 究 科	129	4	3	136	13	3	3				19	68	2	6	76	95
エ ネ ル ギ ー 科学 研 究 科	112		4	116	6	2	1				9	11			11	20
情報学研究科	168		9	177	6	2					8	32		4	36	44
生命科学研究科	83			83												
合 計	1,904	27	67	1,998	118	22	27	1			168	540	21	26	587	755

（注）生命科学研究科博士後期課程は、平成13年度から受入れ予定

研 究 科	博 士 課 程					研 究 科	一 貫 制 博 士 課 程				
	入学者	外国人留学生 国費	外国人留学生 私費	転入学者	合計		入学者	外国人留学生 国費	外国人留学生 私費	編入学者	合計
医 学 研 究 科	人 140	人 5	人 15	人 1	人 161	アジア・アフリカ 地域研究研究科	人 23	人 3	人 1	人 1	人 27

名誉教授称号授与式

4月6日(木)午前10時30分から、名誉教授称号授与式が、京大会館において挙行された。

授与式は、部局長の出席のもとに行われ、称号授与のあと、「総長のあいさつ」があり、午前11時15分終了した。

称号を授与された方は、次の44人である。



(氏 名)	(推 薦 部 局)	(氏 名)	(推 薦 部 局)
曾 根 良 夫	(工 学 研 究 科)	藺 田 坦	(文 学 研 究 科)
高 橋 旨 象	(木 質 科 学 研 究 所)	菊 地 宏 吉	(工 学 研 究 科)
瀬地山 敏	(経 済 学 研 究 科)	興 膳 宏	(文 学 研 究 科)
藺 田 稔	(総 合 人 間 学 部)	小 岩 昌 宏	(工 学 研 究 科)
廣 田 襄	(理 学 研 究 科)	吉 田 郷 弘	(工 学 研 究 科)
岩 井 齊 良	(総 合 人 間 学 部)	山 田 公	(工 学 研 究 科)
白 石 信 夫	(農 学 研 究 科)	山 口 知 三	(文 学 研 究 科)
野 中 泰 二 郎	(防 災 研 究 所)	中 居 文 治	(経 済 学 研 究 科)
福 井 有 公	(医 学 研 究 科)	上 田 皖 亮	(工 学 研 究 科)
八 田 夏 夫	(エ ネ ル ギ ー 科 学 研 究 科)	柴 田 光 蔵	(法 学 研 究 科)
國 枝 治 郎	(防 災 研 究 所)	吉 川 忠 夫	(人 文 科 学 研 究 所)
木 村 光	(食 糧 科 学 研 究 所)	山 岡 仁 史	(工 学 研 究 科)
丸 山 圭 藏	(総 合 人 間 学 部)	古 澤 巖	(農 学 研 究 科)
柴 田 俊 忍	(工 学 研 究 科)	向 山 毅	(化 学 研 究 所)
佐々木 正 夫	(放 射 線 生 物 研 究 セ ン タ ー)	桂 順 治	(防 災 研 究 所)
土 方 弘 明	(理 学 研 究 科)	久 野 英 二	(農 学 研 究 科)
菊 池 光 造	(経 済 学 研 究 科)	勝 村 哲 也	(人 文 科 学 研 究 所)
山 邊 時 雄	(工 学 研 究 科)	住 友 則 彦	(防 災 研 究 所)
高 木 興 一	(工 学 研 究 科)	長 谷 正 當	(文 学 研 究 科)
平 井 武	(理 学 研 究 科)	應 地 利 明	(ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科)
荒 牧 典 俊	(人 文 科 学 研 究 所)	福 井 捷 朗	(東 南 ア ジ ア 研 究 セ ン タ ー)
齋 藤 衛	(理 学 研 究 科)	宮 本 武 明	(化 学 研 究 所)

平成12年度入学者選抜学力試験の結果

平成12年度入学者選抜学力試験（第2次学力検査）の前期日程試験は2月25日（金）・26日（土）に、後期日程試験は3月13日（月）・14日（火）に実施した。

学部別の受験者数、合格者数及び入学者数等は次表のとおりである。

学 部	(A) 募集人員	(B) 志願者数	(C) 倍率 (B/A)	(D) 第1段階 選抜合格者数	(E) 受験者数	(F) 倍率 (E/A)	(G) 欠席者数	(H) 欠席率	(I) 合格者数	(J) 辞退者数	(K) 追加合 格者数	(L) 入学者数
総合人間学部	130人											134人
前期 文系	55	224	4.1	220	216	3.9	4	1.8	57			
前期 理系	55	237	4.3	231	227	4.1	4	1.7	57			
後期	20	379	19.0	320	202	10.1	118	36.9	20			
文 学 部	220											225
前期	190	629	3.3	629	623	3.3	6	1.0	194			
後期	30	412	13.7	301	138	4.6	163	54.2	31			
教 育 学 部	60											63
前期	40	165	4.1	160	159	4.0	1	0.6	42			
後期	20	168	8.4	145	91	4.6	54	37.2	21			
法 学 部	340											358
前期	320	838	2.6	838	823	2.6	15	1.8	325			
後期	20	471	23.6	341	101	5.1	240	70.4	33			
経 済 学 部	230									4		238
前期 一般	160	619	3.9	619	611	3.8	8	1.3	160			
前期 論文	50	278	5.6	278	259	5.2	19	6.8	52			
後期	20	676	33.8	676	450	22.5	226	33.4	30			
理 学 部	301									6	6	301
前期	271	968	3.6	949	937	3.5	12	1.3	271			
後期	30	1,062	35.4	1,038	727	24.2	311	30.0	30			
医 学 部	100											105
前期	90	481	5.3	421	413	4.6	8	1.9	93			
後期	10	264	26.4	151	78	7.8	73	48.3	12			
薬 学 部	80									1	1	82
前期	70	193	2.8	193	187	2.7	6	3.1	72			
後期	10	133	13.3	133	87	8.7	46	34.6	10			
工 学 部	975									3		975
前期	874	2,481	2.8	2,480	2,449	2.8	31	1.3	875			
後期	101	1,335	13.2	1,285	702	7.0	583	45.4	103			
農 学 部	300									2		311
前期	240	751	3.1	751	736	3.1	15	2.0	249			
後期	60	807	13.5	807	506	8.4	301	37.3	64			
小 計	2,415	7,864	3.3	7,769	7,640	3.2	129	1.7	2,447			
後期	321	5,707	17.8	5,197	3,082	9.6	2,115	40.7	354			
計	2,736	13,571	5.0	12,966	10,722	3.9	2,244	17.3	2,801	16	7	2,792

〔注〕受験者数・欠席率は最終教科のものである。

〔外国学校出身者のための選考の実施結果（外数）〕

学 部	(A) 募集人員	(B) 志願者数	(C) 倍率 (B/A)	(D) 第1段階 選考合格者数	(E) 受験者数	(F) 倍率 (E/A)	(G) 欠席者数	(H) 欠席率	(I) 合格者数	(J) 辞退者数	(K) 入学者数
法 学 部	20人以内	47人	2.4	28人	18人	0.9	10人	35.7%	10人	1人	9人
経 済 学 部	10人以内	33	3.3	18	12	1.2	6	33.3	6		6

医療技術短期大学部の動き

平成12年度医療技術短期大学部入学式

4月7日（金）午前10時から，平成12年度医療技術短期大学部入学式が，名誉教授をはじめ来賓出席のもとに，本短期大学部講堂において挙行された。

入学式は，長尾 真学長の式辞，来賓祝辞があり，午前10時30分終了した。



医療技術短期大学部名誉教授称号授与式

4月7日（水）午前9時30分から，医療技術短期大学部名誉教授称号授与式が，本短期大学部会議室において挙行された。

授与式は，称号授与のあと，「学長のあいさつ」があり，午前9時40分終了した。

称号を授与された方は，次の2人である。

下 野 登士男（一般教育）
濱 弘 道（理学療法学科）



平成12年度医療技術短期大学部入学者選抜試験の結果

医療技術短期大学部では，平成12年度入学者選抜試験を3月2日（木），3日（金）に実施し，その合格者を3月10日（金）に発表した。ただし，助産学特別専攻の入学者選抜試験は1月28日（金）に実施し，合格発表は2月4日（金）に行った。

受験者数，合格者数及び入学者数等は次表のとおりである。

区 分	募 集 人 員	志 願 者 数	受 験 者 数	合 格 者 数	入 学 者 数
看 護 学 科	80 人	282 人	237 人	121 人	80 人
衛 生 技 術 学 科	40	282	246	65	40
理 学 療 法 学 科	20	268	220	27	22
作 業 療 法 学 科	20	169	145	25	20
小 計	160	1,001	848	238	162
助産学特別専攻	20	109	91	20	20
合 計	180	1,110	939	258	182